

災害の記憶を継ぐ

～過去の検証作業が喚起した事例を基に～

三上 喜美男

名古屋市立大学 22 世紀研究所特任教授
神戸新聞論説委員長

I 「風化」にあらがう

神戸と周辺地域に甚大な被害をもたらした阪神・淡路大震災から、今年の 1 月 17 日で 23 年となった。四半世紀近くの時間が流れれば、被災地の状況も変わる。

神戸市では「震災を経験していない」市民が人口の 4 割を超えた。西宮市や芦屋市では住宅開発や高齢化の影響で、震災前から人口の 8 割が入れ替わったとみられる。

神戸市では、再任用や臨時職員を除く市の正職員約 14000 人のうち、震災が発生した 1995 年以降の採用者が半数以上を占めている。地元の小中高校などでは、震災の年に生まれた世代がこの春から教員として採用されるケースが増える⁽¹⁾。

他地域からの「震災を知らない」転入者や若い世代が多数を占め、社会の担い手となりつつある。地元の日刊紙「神戸新聞」でも、現場取材に当たる記者の主力は震災を直接経験していないか、記憶していない若い記者たちである。

被災地では、既に何年も前から「震災の風化」を心配する声が聞かれている。経験や教訓を、災害を知らない次の世代にどのように伝えるかが大きな課題とされている。

そうしたなか、神戸は昨年、1967（昭和 42）年に発生した「42 年豪雨災害」と呼ばれる大規模土砂災害から 50 年の節目を迎えた。シンポジウムなどの記念行事が開催され、体験者の証言を収めた資料も作成されるなど、再検証の取り組みが進められた。

印象的だったのは、記念行事が「42 年豪雨災害」にとどまらず、他の災害の記憶まで呼び起こしたこと、さらに古い土砂災害の新史料発見とも重なったことである。

本稿では、過去の災害を検証する取り組みが埋もれた記憶を喚起した事例を紹介し、記憶の継承の在り方について考える。

II 復興の中で

「それは震災の前のことですか？ 後のことですか？」

阪神・淡路の被災地である神戸や阪神間などでは、日常、そういったやりとりがごく自然にかわされる。住民同士で過去の出来事や思い出を話し合う場合、震災があった年の前

か後かが、記憶上の時間軸の区切りとして意識されているのである。

震災で地域の姿や人々のものの考え方が変わったという実感を、多くの人が持っているように思える。東日本大震災などの被災地でも同じことが言えるのではないかな。

昭和の歴史を振り返るとき、戦争を境目にして「戦前」と「戦後」に分けて考えることが多い。戦争の前と後で時代の「質」が大きく異なるからだろう。同様に、阪神・淡路大震災の被災地では、震災が「時代の転換点」と捉えられている。

インフラなどハード面の復興は、多くの被災者が思い描いた以上に迅速に進んだ。住宅が文字通り軒並み倒壊した地域でも、再建された民家や新しいビルが立ち並び、再開発や区画整理が施されて街の景観はほぼ一新された。

被災した古い建物などの取り壊しが被災地全体で急速に進められた。その結果、震災復興事業が災害の痕跡をまちの中から消し去ることになった。大きく破損した神戸港メリケンパークの岸壁など、保存されたごく一部の震災遺構を除けば、被災地を歩いても当時の甚大な被害をしのぶことは難しい状況だ。

芦屋市では全・半壊棟が 8784 棟と建物の 57%に達した。関連死を含めて 444 人が亡くなるなど、最も甚大な被害を被った地域の一つだ⁽²⁾。しかし震災後、企業や金融機関の社宅跡などがマンションに姿を変え、新しい人工島の埋め立てによる開発も進んだ。

芦屋市立美術館が写真家・米田知子の写真展「震災から 10 年」を開催したのは 2005 年のことだ。米田は「記憶」をテーマとする作品を手掛け、芦屋市内などの被災地を歩いて写真を撮影した⁽³⁾。

展示された写真は一見何の変哲もない風景に見える。再建された住宅街の中にある空き地や、高速道路の向こう側に立ち並ぶ高層住宅の遠景……。住宅地の中にぽっかりと穴が空いたような空き地の写真は「そこにかつて家があり、人が住んでいたのだ」と告げているのだが、その〈声〉を聞き取るには、見る側が心の感度を高めねばならない。

何気ない風景に潜む違和や差異に気が付けば、災害によって失われたもの大きさ、傷痕の深さに思いが及ぶ。きれいに整えられた被災地の風景は「復興とは何なのか?」「災害の記憶とは何なのか?」と問い掛けているようである。

普段以上に感性を研ぎ澄まして注意深い視線を注がねば感じ取れないほど、被災地は見事に復旧・復興を遂げ、装いを整えた。言い換えれば震災 10 年の時点で、早くも街をふつうに歩くだけでは災害の跡をたどることが困難な状況になっていたのである。

とはいえ、肉親を亡くし、心身に深い傷を負った被災者個々の体験や記憶が消えることはまずあり得ない。風化が懸念されるのは、被災者や当事者ではない人たちの記憶や関心である。被災者が最も恐れるのは、時とともに災害そのものが忘れ去られ、やがて自分たちも置き去りにされるという、社会の空気の移ろいだろう。

III 伝わるものと伝わらないもの

一方、当事者から次の世代へと語り継がれた記憶が変容することもある。

前号に掲載した論文「記憶の継承について」では、東日本大震災の大津波に襲われ間一髪で助かった地元新聞記者の体験談を紹介した。この記者は津波警報を聞いた後、高台に逃げるのではなく、逆に海岸へと車を走らせた。近年、この地域に押し寄せた津波はせいぜい数十センチほどの高さだった。この記者はふだんから、警報が出ればまず住民たちが不安げに海を見守る様子を撮影することが報道の使命と考えていた。

記者は海に向かう途中で迫り来る津波の想像を超えた巨大さに気付き、渋滞に巻き込まれて立ち往生した車を捨て、一目散に走った。幸い高台に通じる坂が近くにあり、そこを駆け上がって逃れることができたのである。

歴史上、何度も大津波に襲われた地域であっても「すぐ逃げろ」という教訓は必ずしも浸透、定着していなかったといえる。反対に、いつの間にか津波は海辺で高さなどを観察するものだという危険な認識が芽生えていた。津波という言葉で何を連想するかは、時代や地域、個人によって異なっていたといえる⁽⁴⁾。

阪神・淡路の 28 年前に発生した「42 年豪雨災害」に話を移したい。

昭和 42 年の 7 月 8 日から同 9 日にかけて、台風崩れの熱帯低気圧の影響を受けた梅雨前線が西日本各地に集中豪雨をもたらした。神戸の市街地の北を東西に走る六甲山地では各地でがけ崩れが起き、土石流が人口密集地を直撃した。河川の決壊や氾濫も相次ぎ、家屋の全壊流出 361 世帯、半壊 376 世帯などの被害が出て、死者は 84 人に上った。谷崎潤一郎が「細雪」で描いた「阪神大水害」（1938 年）以来の大災害となった⁽⁵⁾。

筆者が神戸新聞社に入社した 1981（昭和 56）年当時、「42 年豪雨災害」の取材経験がある記者はまだ在籍していた。耳にしたのが「歩行者の姿が消えた」という話である。

土石流や河川の氾濫の影響で市街地は泥に覆われた。泥をかき分け歩いていると、目の前にいた歩行者の姿が突然、見えなくなった。泥の下に何があるかは見えないので分からない。歩行者は隠れていた溝などの深みにはまったというのである。

複数の経験者から聞いたので、実際にあった出来事と考えていい。詳しい事情は分からなくても、聞いた人は誰もが「泥の中を歩くのは危ないな」と受け止めるだろう。大切なのは、土砂災害の 2 次被害を防ぐ教訓として心にとめることだ。

「42 年豪雨災害」から 50 周年の節目となった昨年、その話の背景や事情がもう少し分かってきた。六甲山系の治山治水を担当する国土交通省近畿地方整備局六甲砂防事務所による聞き取りに、体験者の一人が当時の記憶を語ったのである。

当時 19 歳だった男性は神戸市東灘区の住吉地区でこの土砂災害を体験した。「目の前で歩行者の姿が消えた」という話に関する当時の記憶を次のように述べている。

豪雨の影響で道路に水がたまり、民家の床に浸水した。誰かが道路のマンホールのふ

たを開けて水を流そうとしたらしい。そこに通行人が落ちて何人かが亡くなった。その後、ふたを開けた人と犠牲者の遺族の間で大きな問題になったと聞いている。

当時、歩行者が深みにはまる事故が続発したのはなぜか。この証言によって事情の一端が浮き彫りになった。証言者は地元で生まれ育ち、地域の歴史保存活動に取り組んでいる住民の一人で、語られた内容の信ぴょう性は高いとみていいだろう。

証言によると、「水が早く引くように」と考えてマンホールのふたを開けた住民の行為が、予期しなかった人的被害を招いたことになる。土砂災害災時に決してしてはいけないこと、地域で継承すべき記憶として、教訓が明確になったといえる⁽⁶⁾。

それまでは詳細や背景が分からず、単に「ありそうな怖い話」のレベルにとどまっていた。歩行者の事故を招いた事情や責任問題などの込み入ったいきさつは省略され、シンプルな災害エピソードの一つとして語られていた。だからこそ口から口へと伝わる力が高まったともいえるが、継承すべき重要な事実＝教訓が脱落する結果にもなった。

50 年の節目を記念する取り組みが体験者の記憶を掘り起こし、少しだが当時の事情を浮き彫りにした。災害の記憶の中には、掘り起こし、記録し、伝える努力を怠れば伝わらないものがある。そのことに改めて留意しなければならない。

IV 喚起される記憶

とはいえ、神戸や阪神間でも震災から 20 年以上過ぎれば震災の体験を語り合う機会はそう多くない。語るのにつらい内容もあり、日ごろはなかなか口にはできないものだ。ふだん意識の奥にしまわれた記憶を呼び起こすには、何らかのきっかけが要る。被災者一人一人が胸の内を自然に口にできる、語らいの「場づくり」が重視されるゆえんである。

ところで、ことさら「場」は設けられなくても、災害から何年という節目を記念する活動が、経験者の心を動かすことがある。「昭和 42 年豪雨災害」から 50 周年の節目に向けて「神戸新聞」は当時の状況を振り返り、砂防ダム建設などの防災対策を紹介する記事を随時掲載した。その記事を読んで筆者の元にはがきを送ってきた高齢の男性がいる。

年齢は 80 代後半で、子どものころ今の神戸市長田区の沿岸部で目の当たりにした豪雨災害の様子をつづってきた。「昭和 42 年豪雨災害」を振り返った筆者のコラムを読むうちに、内容に触発されて、当時の記憶が次々によみがえったのだという⁽⁷⁾。その時の心境を「思い出の洪水におぼれている」と記している。

その思い出とは、「42 年豪雨災害」のさらに 29 年も前に発生した「阪神大水害」の記憶である。

概略は次の通りだ。

当時は小学 2 年生だった。降り続いた大雨がやんで一息ついたころ、どっと洪水が押

し寄せてきた。家の二階から見ていると、家財道具が次々に流れてきた。そのうちに「子どもが流された」という悲鳴とともに大勢の人が海に向かって走って行った。それを見て急に恐ろしくなった。

谷崎は名作「細雪」の中で、芦屋から神戸市東灘区にかけての水害の状況を活写している。同じころ、西部の長田区でも悲惨な情景が繰り広げられていた。この目撃談もその一つだ。水害は東西に長い神戸の市街地のほぼ全域にわたって人々を苦しめた。

この時期に幼いころの災害体験の記憶が喚起された人はほかにもいるだろう。

「阪神大水害」はどのような災害だったのか。

1938（昭和 13）年 7 月 3 日から 5 日にかけて降り続いた大雨により、六甲山系の各地で地盤が崩壊し、土石流が市街地に流れ込んだ。被害は神戸市を中心に阪神間の広い範囲に及び、土砂とともに巨岩や流木が押し寄せ、建物の倒壊や流出、埋没が多発した。鉄道や道路が寸断され、水道などのインフラも損壊、地域全体が大きな被害を受けた。

神戸一帯で過去、土砂災害が繰り返されてきたのは、六甲山地の地質が関係している。六甲山系の地質は崩壊しやすい花崗岩でつくられ、地中で風化が進んでいる。そのため豪雨によって山崩れを引き起こしやすくなっている。

「阪神大水害」を受けて土砂から市街地を守る砂防ダム建設などの対策が積極的に進められた。そのおかげで「42 年豪雨災害」では市街地の被害がかなり軽減できたとされる。近年、神戸で市街地の深刻な土砂被害は起きていないのは、治山対策が進んだからでもある。とはいえ昨年、九州北部を襲った豪雨のように膨大な降雨量に達すれば、六甲山系があらためて牙をむく恐れは十分にある。

芦屋との市境に近い神戸市東灘区では、とりわけ住吉川一帯が壊滅的な状況に陥った。

「昭和 42 年豪雨災害」での歩行者事故の証言者が住む地域である。

住吉川から西部の御影にかけての一带は、関西財界の創業家などの邸宅が集まる「お屋敷まち」だった。住友家本邸や東洋紡社長の小寺源吾邸、鐘紡社長の武藤山治邸、日本生命社長の弘世助三郎邸、野村財閥の野村徳七邸、大林組社長の大林義雄邸、乾汽船社長の乾豊彦邸、武田薬品社長の武田長兵衛邸、伊藤忠の創業者の伊藤忠兵衛邸、岩井商店主の岩井勝次郎邸、東京海上社長の平生鈆三郎邸…とそうそうたる顔ぶれだ。「日本一の長者村」と呼ばれたという⁽⁸⁾。

こうしたお屋敷も多くが土石流に直撃された。昨年、地元の旧邸宅の一つから災害発生後の状況を撮影した古い写真 25 枚と家人の日記が見つかった。たまたま邸内を整理した身内の人が発見したもので、くしくも「42 年豪雨災害」の節目に、「阪神大水害」の埋もれた記録が発掘されるという巡り合わせとなった。



写真 1

住吉駅あたりだろうか、別の写真では汽車が立ち往生している（写真 2）。

さらに別の写真では、復旧の作業員が庭に入っている。災害後しばらくたったころと思われる。作業員が腰を下ろしている瓦が 1 階の屋根とみられ、2 階まで完全に土砂に埋まったことが分かる（写真 3）。

若き日の孝次郎氏のものとみられる日記も発見された。

それによると、7 月 5 日午前 9 時ごろ、住吉川の上流が決壊し、土砂や岩石が流れ下った。邸内は土砂で 15 尺（約 4・5 メートル）も埋まり、2 階に移って難を逃れた。台所は半壊、広間は流出し、邸内と周辺は「全くの河原と化し、一物を残さず全く惨憺たる有様なり」。幸い家族らは無事だったが、家の損害がひどくて住めず、とりあえず他家



写真 3

写真などが見つかったのは阿部さん方で、発見者の女性の曾祖父・房次郎氏は紡績業や製糸業を興し、大阪商工会議所顧問や貴族院議員を務めた人物だ。祖父の孝次郎氏も東洋紡績の社長、会長を歴任し、関西経済連合会会長に就任した大物実業家である。

当時、邸宅は住吉川の西岸沿いにある、山から大量の岩が流入し、敷地を埋め尽くした（写真 1）。



写真 2

に身を寄せ、その後、近所に借家を見つけた、とある。

阿部邸はその後、西側の別の土地に再建された。いまでも建物の一部が残っており、その中に写真などが残されていた。

写真の一部は「42 年豪雨災害」関連のシンポジウムの講演で筆者が紹介し、発見に至る経緯を紹介した。さらなる調査は歴史研究の専門家の手に委ねたい。地元の災害史をたどる貴重な史料となることは間違いない。

V 史料を残す意味

23 年前に起きた阪神・淡路大震災は、神戸や阪神間で暮らす人たちにも、予想もしない規模の大災害だった。当時の「神戸新聞」論説委員長だった三木康弘（故人）は、倒壊した自宅で父親を亡くした経験を基に、自分たちの油断とおごりを自戒した。

「被災者になって分かったこと」と題した社説にこうつづっている⁽⁹⁾。

これまで被災者の気持ちが本当に分かっていなかった自分に気づく。「災害元禄」などといわれた神戸に住む者の、一種の不遜さ、甘さを思い知る。

この街が被災者の不安やつらさに、どれだけこたえ、ねぎらう用意があったかを、改めて思う。(1995 年 1 月 20 日付朝刊社説)

歴史をたどれば神戸と周辺地域は大災害に何度も襲われている。阪神・淡路の前に大地震発生に警鐘を鳴らした専門家もいた。しかし、行政を含めて本気で災害に備える動きにはならなかった⁽¹⁰⁾。突然の震災で「不遜さ」「甘さ」を思い知ったのである。

被災者個々の記憶は、それだけでは個人的なものである。地域全体で教訓を共有して未来の災害に備えるためには、「個人的記憶」を「集合的記憶」とする必要がある。しかし記憶が経験者から次の世代にリレーできるのはせいぜい 3 世代までとする研究者もいる。何もしなければ記憶はもっと早く色あせ、変容して、いつか消失するだろう⁽¹¹⁾。

災害の記憶は次の世代に託さねばならない。文書、絵画、写真、動画、遺物…。どんな形でもいい。後でたどることを可能とする形で記録し、保存しておく。多様な検証ができるよう、記録はできるだけ当事者の体験を生々の形で伝えるものが望ましい。

記録には、体験者や災害を見聞きした人たちの思いが込められている。それに接する未来の人も、同じ生身の人間として、心を動かされることになるだろう。心の振れ幅が大きいほど、個人の思いは熱く、強く発信され、社会全体の記憶となる可能性が高まる。

記憶の継承は、未来の誰かに向けての、心と心のリレーでもある。

⁽¹⁾ 神戸市民に占める震災経験のない人の割合については神戸新聞ウェブ「NEXT」の「データでみる阪神・淡路大震災」、西宮、芦屋市の人口については 2014 年 1 月 12 日付神戸新聞「震災 19 年、西宮・芦屋 8 割入れ替わり」、阪神・淡路大震災の後に採用された被災自治体 12 市の職員については 2017 年 1 月 16 日付神戸新聞「震災後の入庁者過半数に」を参照

⁽²⁾ 芦屋市HP「建築物の被害と復旧」

⁽³⁾ 「震災から 10 年 米田知子展」2005 年 2 月 26 日～4 月 10 日、芦屋市立美術博物館

⁽⁴⁾ 名古屋市立大学 22 世紀研究所評論集 2017 「記憶の継承について」三上喜美男

⁽⁵⁾ 「42 年豪雨災害」「阪神大水害」の被害については国土交通省近畿地方整備局六甲砂防事務所HP「六甲の災害史」を参照

⁽⁶⁾ 証言の詳細は六甲砂防事務所HP「六甲の災害史」の「昭和 42 年 7 月豪雨」に「体験談

インタビュー」に収録。歩行者の事故について語っているのは内田雅夫さん

⁽⁷⁾ 筆者のコラムは 2017 年 7 月 9 日付神戸新聞日曜小論「50 年前の豪雨災害」

⁽⁸⁾ 月刊「神戸っ子」HP の「神戸っ子アーカイブ」では「日本一の長者村 財界人たちが邸宅を構えた住吉村」として紹介している

⁽⁹⁾ 神戸新聞ウェブ「NEXT」阪神・淡路大震災連載・特集「1995・1・17 と直後の紙面から」に全文を収録

⁽¹⁰⁾ 神戸市の依頼で調査した大阪市立大と京都大のチームは 1972 年の報告書で神戸に都市直下型地震が起こる恐れを指摘した。しかし発生時期の予測は難しく、神戸市の防災計画地震対策の検討では想定震度を「6」とする専門家の意見もあったが議論がまとまらず、最終的に「5 の強」とする記載にとどまった。阪神・淡路大震災ではそれを上回る震度 7 が初めて観測されている。その経緯は神戸新聞ウェブ「NEXT」阪神・淡路大震災連載・特集「想定を問う 神戸の防災計画」に詳しい

著者連絡先 ; 三上 喜美男 (Kimio Mikami)

名古屋市立大学 22 世紀研究所

〒467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄 1

E-mail; mikami-km @ kobe-np. co. jp (使用时@前後のスペースを除去して下さい)

Published online; May 18, 2018